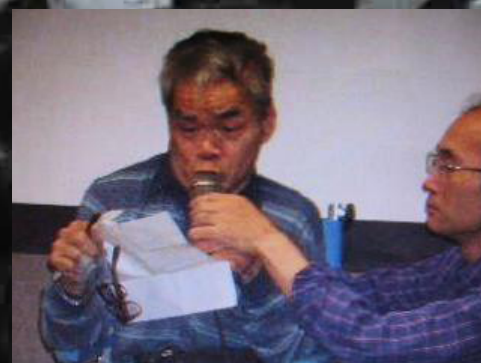


# 障害者虐待差別と闘ったドキュメント映画

人間を取り戻せ！

## 大久保製塩闘争の記録



制作=ビデオプレス 40分

上映  
&  
講演会

- ・とき 2018年4月20日(金曜日) 午後18時から
- ・ところ 越谷市中央市民会館  
〒343-0813 埼玉県越谷市越ヶ谷4-1-1  
東武スカツリーライン越谷駅東口より徒歩7分
- ・講演者 長崎広さん(全国一般東京東部労組副委員長・大久保製塩支部副委員長)
- ・参加費 無料

▽時代背景 1975年、墨田区にある「リポピタンD」などのガラス壘製造工場の大久保製塩所における長年の障害者・労働者への虐待・酷使・差別に抗し、ついに36名の障害者・労働者がキリスト教会籠城闘争に決起しました。一旦は勝利しましたが、職場に戻った労働者に会社側はあらゆる卑劣な労働組合攻撃で襲いかかってきました。しかし、地域・全国の仲間を支えられた東部労組大久保製塩支部は、歯を食いしばりながら職場・地域・都労委・裁判で頑張り抜き、職場では次々と仲間と団結し、地域では毎回300名を超える「路地から路地デモ」等で会社を追いつけていきました。

▽たたかい 1987年には、御用労組の青年労働者24名が

決起し支部と合流します。危機感を抱いた大久保実社長は、暴力団員を雇い、本物の覚せい剤を長崎副委員長のオートバイに仕込ませ、長崎副委員長を逮捕させるという誣告犯罪攻撃を仕掛けてきます。しかし、東部労組・職場・地域・弁護団のすかさずの反撃で、大久保実社長らは逮捕され、実刑2年の獄につながれます。

▽全面解決 1995年、東部労組の「総反攻」の方針のもと、ストライキ33回、リレーストライキ143日やのべ700名3回に及ぶ大正製薬本社行動等の連続闘争を闘い、ついに1997年東京都労働委員会において支部の要求が満たされた協定が締結され、21年9ヵ月間の大久保製塩闘争の勝利的全面解決が実現します。

・主催 NPO障害者の職場参加をすすめる会

〒343-0023 越谷市東越谷1-1-7 須賀ビル101  
職場参加ビューロー・世一緒(よいしょ)内 TEL 048-964-1819  
shokuba@deluxe.ocn.ne.jp

## 一緒に街に出始めたわらじの会 はじめてのデモ



2004年に当法人の設立から四半世紀以上前の1978年9月—その5ヶ月前に「障害のある人もない人も地域で共に生きよう」とスタートしたばかりのわらじの会の6人は、墨田区の路地から路地へ練り歩くデモの中にいた。

60年代後半から70年代を通じて、経済成長が社会の繁栄につながり、家庭の幸福につながるといった幻想に、つぎつぎとほころびが生じてきた。企業による公害たれ流しや労働災害、職業病、そして、被差別部落や外国人、障害者差別、女性差別などが、表面化してきた。埼玉の地域には、年々全国各地から多くは東京を經由して人口流入が続いていた。さまざまに異なる生活史や感覚をひきずった

人々が出会うことで、職場や地域をあらためて見直そうという意識が醸成されていた。

当時の越谷市職員組合の人々は、自分たちの職場の中で一般職と現業職の間の格差があることや、委託労働者の劣悪な労働条件をなんとかしようとする取り組みと同時に、地域の人々に対してもただサービスの提供者・利用者としての関係だけでなく、生活者同士として共に生きようと、さまざまな試みを始めたところだった。わらじの会の代表になる野沢、そして新坂姉妹も、会発足以前から若手職員たちが、花見やもちつきに誘うことによって、外に出始めていたのだった。

そんな市職員たちの呼びかけで、一緒に出かけた大久保製薬闘争のデモ。リポビタンDの壘などを生産している同社は、大久保一族が障害者を多数雇用し、職場の中に重層的な差別構造を築いて、利益を上げていた。障害者たちは組合からも排除されていたが、妨害工作をはねのけて自分たちの組合を作った。会社側は切り崩しに躍起となり、裁判になっていた。

## 誰もが一緒に生きる街になったか—大久保製薬から考える



車イスの女性は、わらじの会の発足と同時に家の奥から街へ出てきたばかり。彼女は後にわらじの会内に結成される「自立に向かってはばたく家準備会」という障害者集団の代表となる。

いずれにせよ、障害者が街で生きるための制度は、当時なにもなかった。いまのように介助で生活するなど、ありえなかった。ボランティアはいたが、施設のお手伝いが主だった。ボランティアが施設の入所者の個人的外出を手伝うことすらも、不公平になるからとか、責任が取れないからと、却下されることがよくあった。

在宅の障害者が街へ出てゆくことは、しばしば家族の不安を募らせ、拒否された。駅へ行けば、階段ばかりだし、当時の改札は狭く車イスが通る幅はなかった。駅員の制止をふりきり、乗客たちの手を借りて、改札をこえ、階段をかつぎ、電車に乗って出かけた。

あれから40年。街のバリアフリー化は進み、福祉や雇用の支援制度は抜本的に拡がった。しかし、ほんとうに誰もが一緒に生きる街になったのか？ 大久保製薬闘争の記録映画と当時から現在まで闘い続けてきた長崎さんのお話を受けてみんなで考えたい。(NPO職場参加をすすめる会 山下浩志)